

2. 韓国語口頭能力評価に関する先行研究

90年代

- OPIの評価体系を適用した研究
- 第1回韓国語OPI試験官養成ワークショップ



OPIの問題点を指摘した研究

00年代

- 外国語評価をもとにした熟達度評価研究
- 到達度評価の基礎研究

2. 韓国語口頭能力評価に関する先行研究

＜先行研究の問題点と課題＞

評価体系A

実証的研究により
問題点を究明する

評価体系B



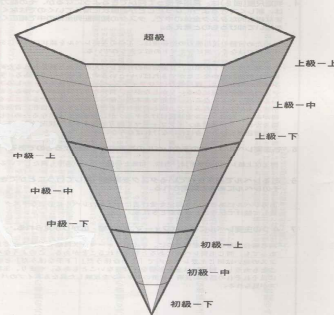
第3の評価
体系の開発

3. ACTFL-OPIの概観

ACTFL-OPIとは

- ❖ 汎言語性を特徴とし、韓国語を含めた47ヶ国語を対象に実施されている口頭能力の熟達度試験
- ❖ 試験を受ける学習者(以下:被験者)が機能的にどのくらい話す力があるかを総合的に評価するための標準化された手順
- ❖ 被験者が「何ができて、何ができないか」のパターンをインタビューとロールプレイによって見極めることにより、言語運用能力を総合的に測定

3. ACTFL-OPIの概観



3. ACTFL-OPIの概観

ACTFL-OPIの判定尺度と評価基準

＜判定の際に照準となる4つの要素＞

- ❖ 言語を使って何ができるかという総合的タスク、あるいは機能
- ❖ 言語が使われる社会的場面と話題領域
- ❖ 社会的場面・話題領域と密接な関係にあり、話し手がタスクをどのくらい上手にこなすかのカギとなる正確さの特性
- ❖ 産出されたテキストの型

3. ACTFL-OPIの概観

	総合タスク/機能	場面/話題	正確さ	テキストの型
中級	自分なりに文を作ることができ、簡単な質問をしたり相手の質問に答えたりすることによって、簡単な会話なら自分で始め、続け、終わらせることができる	いくつかのインフォーマルな場面と、事務的・業務的な場面の一部/日常的な活動に関する予想可能で、かつ身近な話題	母語話者でない人との会話に慣れている聞き手には、何度も繰り返すことによって、理解してもらえる	文
初級	丸暗記した型通りの表現、単語の羅列、句を使って、最小限のコミュニケーションをする	最もありふれた、インフォーマルな場面/日常生活における、最もありふれた事柄	母語話者でない人との会話に慣れている聞き手さえ、理解するのが困難である	単語と句

3. ACTFL-OPIの概観

正確さの下位項目(1)

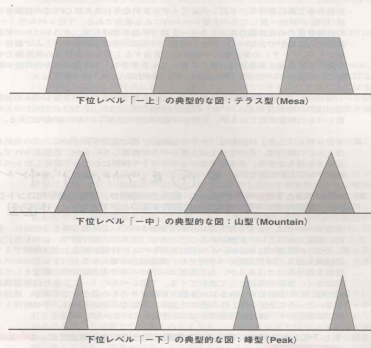
	文法	語彙	発音
中級	高頻度構文がかなりコントロールされている	具体的で身近な基礎語彙が使える	母語話者ではない人との会話に慣れている人にはわかる
初級	語・句のレベルだから文法は事実上ないに等しい	わずかな丸暗記した基礎語彙や挨拶言葉が使える	母語の影響が強く、母語話者ではない人との会話に慣れている人にもわかりにくい

3. ACTFL-OPIの概観

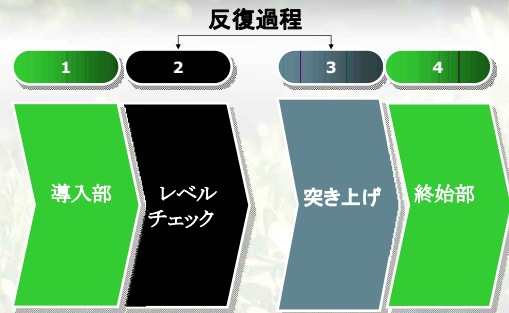
正確さの下位項目(2)

	社会言語学的能力	語用論的能力	流暢さ
中級	常体か敬体のどちらかが駆使できる。	相づち、言い換えなどに成功するのはいま	つかえることが多く、1人で話しつづけることは難しい
初級	暗記した待遇表現だけが使える	語用論的能力はゼロ	流暢さはない

3. ACTFL-OPIの概観



3. ACTFL-OPIの概観



3. ACTFL-OPIの概観

導入部	反復過程 レベルチェック → 突き上げ		終結部
<ul style="list-style-type: none"> 被験者を落ち着かせる。中級レベルを想定し話し始める 被験者の興味、関心に注目する 被験者のレベルに関し見当をつける 	被験者が無理なくできるレベル、つまり下限レベルを見極める	被験者の上限または限界、すなわち、言語的に何ができないか、そのパターンを発見する	被験者にとって楽なレベルに戻し、肯定的な雰囲気を終える
(インタビュー後、ロールプレイの実施)			

3. ACTFL-OPIの概観

<発話サンプル抽出の注意事項>

- 被験者の文法や情報を正してはいけない
- 十分な判定材料がないのに話題を変えてはいけない
- 被験者にOPIの主導権を与えてはいけない
- 試験中にメモしてはいけない 等

<判定に関する注意事項>

- 被験者の発話を他の人の発話と比較してはいけない
- 1度だけテープを聞いただけで判定してはいけない
- すべての沈黙を否定的兆候とみなしてはいけない 等

<その他の取り決め>

- 非言語は目標言語で言い換えさせる
- ロールプレイの設定場面の提示は被験者の母語か媒介語で行う 等

4. 口頭能力試験に関する実態調査

<調査概要>

- ❖ 調査目的
日本の初修外国語としての韓国語教育で行われている口頭能力試験の実態を明らかにする。
- ❖ 調査時期と対象
2006年前期から2009年前期までに開講された韓国語関連の初級レベル38科目(18教育機関)
- ❖ 調査方法: 設問紙調査
- ❖ 調査内容
①担当教師に関する設問(性別、母語、専攻分野、教育歴)
②科目に関する設問(学習者数、授業時間数、レベル、到達目標、使用教材)
③口頭能力試験に関する設問(口頭能力試験実施の状況、試験の目的、方法、採点基準、実施回数、口頭能力試験を現在実施していない科目に関しては、その理由と必要性)

4. 口頭能力試験に関する実態調査

<担当教師に関する設問>

- ❖ 教師(試験官)の母語
日本語 2名 韓国語 13名
- ❖ 教師の専攻分野
韓国語教育学 2名
韓国語学 2名
日本語教育学 2名
日本語学、日本文学、応用言語学 1名、
その他言語以外 6名
- ❖ 韓国語の教育歴
1年~5年 6名、6年~10年 5名、11年~15年、16年~20年 2名

4. 口頭能力試験に関する実態調査

<科目に関する設問>

レベル		到達目標	
文字や発音を指導する入門レベル	6科目	コミュニケーション能力/会話能力	30科目
TOPIC1級レベル	22科目	文法能力	8科目
TOPIC2級レベル	10科目		

4. 口頭能力試験に関する実態調査

<授業時間数>

<学習者数の平均>

週1回 1回 90分	16	文字や発音を指導する入門レベル	40名
15週 合計22時間30分			
週1回 90分	11	TOPIC 1級レベル	37名
14週 合計21時間			
週3回 90分	4	TOPIC 2級レベル	19名
15週 合計67時間30分			
週2回 90分	3		
15週 合計45時間			
週2回 90分	2		
14週 合計42時間			

❖ 最も多い科目 120名
❖ 最も少ない科目 8名

4. 口頭能力試験に関する実態調査

<テストに関する設問>

38科目中20科目で口頭能力試験を実施している

主な口頭能力試験の方法

主な評価項目

ロールプレイ	5科目	発音	7科目
スキット	5科目	発音+語彙+文法	3科目
音読	4科目	発音+語彙	2科目
インタビュー	4科目	発音+表現	2科目
スピーチ	3科目	発音+語彙+文章の変換+応用力	2科目

4. 口頭能力試験に関する実態調査

<実態調査の結果>

- ❖ 多くの科目では到達目標としてコミュニケーション能力や会話能力の育成を掲げている
- ❖ 授業時間や学習者数など、様々な制約があるにもかかわらず、半数以上の科目で口頭能力試験が実施されている
- ❖ しかし、試験の方法は、多くのものが音読やスピーチの独語形式の試験ロールプレイやインタビューのような対話形式の試験のどちらかによって行われている
- ❖ また、評価基準に関しては主に文法能力の測定に重点を置く傾向が見られる

4. 口頭能力試験の試案

ACTFL-OPIにおいて「初級の上」と認められる被験者は日常生活で最もありふれた主題・場面において、暗記した単語や句を使つての最小限のコミュニケーション(初級の評価基準)

は十分できる。しかし、

身近な主題や場面において、質問をしながら、文によるコミュニケーション(中級の評価基準)

になると完成度が落ち、完全にできるとは言えないレベルである。

4. 口頭能力試験の試案

<試験の細目表>

試験の目的	学習した内容の習得度を確認しつつ、韓国語の口頭能力を使い「何ができるか」を測定する。
受験者の集団特性・レベル	初級レベルの授業を終えた者、つまり中級レベルに上がる直前の者を対象とする。
測定する能力	ACTFL-OPIの「総合的タスク・機能」、「話題・場面」、「正確さ」、「テキスト型」という口頭能力の構成概念と定義を用いる。「話題・場面」に関しては「初級の上」レベルの被験者が扱える「日常生活においてありふれた事柄で、身近なもの」に固定し、これを点数化しない。
試験方法	独話形式:スピーチ 対話形式:インタビュー・ロールプレイ
試験時間	10分
その他、OPIと異なる点	導入部での試験官の発話は初級レベルから入る。 逆質問は行わない

4. 口頭能力試験の試案

<試験の流れ>

- ①導入部(30秒程度)
- ②スピーチ(2分程度)
- ③スピーチの内容に関するインタビュー(4分程度)
- ④ロールプレイ(3分程度)
- ⑤終始部(30秒程度)

4. 口頭能力試験の試案

① 導入部 30秒程度

挨拶のやりとりをし、被験者を落ち着かせる。試験官は初級レベルでの発話から入り、特に学習者のレベルの目安を測ったりはしない。

T: 안녕하세요.
S: 안녕하세요.
T: 여기 앉으세요.
S: 네.

4. 口頭能力試験の試案

② スピーチ 2分程度

被験者はスピーチを行う。このスピーチは被験者があらかじめ準備した内容であるため、総合タスク・機能とテキストの型の評価は行わず、正確さ(特に文法、語彙、発音)を重点的に評価し被験者へフィードバックする資料を収集する。

제 이름은 ○○○○라고 합니다. 오늘은 제가 살고 있는 기숙사에 대해서 소개합니다. 기숙사 이름은 △△△라고 합니다. 우리는 11시까지 돌아와야 하고, 목욕도 11시까지입니다. 세탁실에는 세탁기(세탁기)하고 건조기가 있어서 편리합니다. 세탁실은... 아, 치가우... 저는 3층에 있고 세탁실(세탁실)은 1층에 있어서 멀니다. 다음은 제가 제 방에 대해서 소개하겠습니다. 방에는 두 사람이 생활합니다. 저는 독일어학과 친구와 같이 살고 있습니다. 또한, 휴게, 휴게실도 있습니다. 거기에는 텔레비전이 있습니다. 텔레비전은 한 층에 한 개밖에 없습니다. 기숙사 생활은 즐겁습니다. 내년에는 나와야 해서 섭섭합니다. 그러니까 이제보다 기숙사 생활을 즐기고 싶습니다. 감사합니다. (所要時間1分53秒間)

4. 口頭能力試験の試案

③ スピーチの内容に関するインタビュー(4分程度)

- ❖ ②のスピーチの内容に関し試験官がOPIの質問の型を活用しながら、学習した内容をできるだけ引き出すよう質問する。
- ❖ その際、スピーチのテーマ、内容に関し初級レベルの質問から中級レベルの質問へ移行しながらインタビューを進める。
- ❖ 被験者から試験官への逆質問は行わない
- ❖ ここでは正確さのみならず、テキストの型も評価し、全体的な総合タスク・機能の達成度も評価する

4. 口頭能力試験の試案

初級レベルの質問の型	質問例
Yes/No 疑問文	기속사는 대학의 기속사예요? / 기속사는 학교 안에 있어요?
事実や情報を求める疑問文	기속사에서 학교까지 얼마나 걸려요? / 몇 명 정도가 기속사에 살고 있습니까?
選択疑問文	보통 저녁 식사는 기속사에서 먹어요? 아니면 학교에서 먹어요?
付加疑問文	음식은 11시까지 쓸 수 있는데 좀 일찍 끝나지 않아요?

中級レベルの質問の型	質問例
自由回答型の依頼表現	룸메이트는 어떤 사람이예요? 왜 내년엔 기속사를 나가야 돼요? 기속사를 나가면 어디에 살 거예요?
丁寧な依頼表現	보통 룸메이트랑 어떤 이야기를 해요? 가르쳐주세요. 기속사 생활이 즐거운 이유가 뭐예요? 이야기해주세요. 기속사에서 불편한 점을 이야기해주세요.

4. 口頭能力試験の試案

④ ロールプレイ(3分程度)

- ❖ ロールプレイはインタビューとは反対に被験者が自発的に発話する「質問する側」の役割を与える
- ❖ ロールプレイでは中級レベルに求められる「やりとりのある、旅行者が遭遇するような状況で、会話を切り出し、維持し、まとめることができるかを調べる(マニュアル, 1999:69)」ことに目的がある
- ❖ 被験者は試験官が準備したロールプレイカード数枚から1枚を選ぶ。

<ロールプレイカード例>

あなたは今、韓国にいます。1時間前にレストランで食事をしました。レストランを出てからすぐ、忘れ物をしたことに気がつきました。レストランへ電話をしてください。(カードは日本語で提示)

4. 口頭能力試験の試案

⑤ 終始部(30秒程度)

被験者を落ち着かせ、被験者が試験に対し肯定的なイメージを持つように努める。

T: 방학 때는 무엇을 할거예요?

S: 아르바이트를 할거예요

T: 한국어도 공부하고 다음 학기에 봐요.

S: 네, 감사합니다.

4. 口頭能力試験の試案

<採点>

- ❖ ACTFL-OPIの「話題・場面」、「正確さ」、「テキストの型」、「総合的タスク・機能」という口頭能力の構成概念と定義を用いる
- ❖ 「話題・場面」に関しては点数化しない。
- ❖ 本来OPIは全体評価をしレベルを決定するが、短期的な学習効果を測る到達度試験では全体評価と分析評価の両方を用いる。
- ❖ 試験官は試験当日と後日の最低2回の判定を行い、被験者にフィードバックする。

<20点満点の場合>

	テキストの型	正確さ	総合タスク・機能	合計
「初級の上」レベル以上	5点	5点	10点	
「初級の中」レベル以上	3点	3点	6点	
「初級の下」レベル	1点	1点	2点	

4. 口頭能力試験の試案

ACTFL-OPIを活用することによる利点と予想される問題点

<利点>

- ❖ 文法能力のみならずコミュニケーション能力の測定を可能にする
- ❖ ACTFL-OPI の各レベルの能力基準を被験者を示すことにより、自分の韓国語のレベルを内省させ、今後の具体的な目標を認識させることができる

<問題点>

- ❖ 既存の指導内容や指導方法、教材に抜本的な見直しが必要と求められることもある
- ❖ 学習した内容を引き出せるよう、タスクや質問の型に工夫が必要
- ❖ 試験時間や教師の負担などの実用性の問題

5. おわりに

2007年「日本の中央教育審議会大学分科会」

大学の教育は『何を教えるか』よりも『何ができるようになるか』を重視する

- ・教師の立場→「『何ができるようになるか』重視の教育」
- ・学習者の立場→「『何ができるようになるか』重視の学習」

ACTFLが示し、近年、CEFRなどで取り上げられている「can do」に重点を置いた外国語教育との共通する



中川正臣

弘益大学 教養科
ソウル大学 師範大学院 国語教育科 韓国語教育専攻 博士課程
masaomi55@hotmail.co.jp